

## 古フランス語におけるCVS語順の平叙文の 名詞主語と人称代名詞主語について(III)

— 13世紀散文作品 *La Vie de saint Eustace* を  
資料体として —

今田良信

### 0. 目的

古フランス語では、何らかの理由で主語が動詞の後に来て、しかも人称代名詞である場合は、その頻度の表現の仕方は各文法書などにより異なるものの、かなり高い割合で省略される旨の記述が一般的になされている。しかし、実際に古フランス語のテキストに当たってみると、省略されていない事例も散見される。筆者は、拙論(2005, 2007)において、従来の方法論の妥当性も含めてこの問題を検討した。具体的には、13世紀の散文作品から網羅的に収集した事例を資料体として、後述する従来とは異なる視点により、CVS語順の平叙文において「動詞の後」および「人称代名詞である時」という2つの条件を満たしながら省略されていない(人称代名詞)主語と「動詞の後」の名詞主語との出現比率などを調べ、文法書の記述とテキスト上の実際の分布状況との違いを調べてみた。本稿では、さらに資料体を広げるべく、13世紀の別の新たな資料に基づいて調査・分析を行うのが目的である。

なお、フランス語における動詞への主語代名詞付加の歴史的経緯などについては、拙論(2007)を参照されたい。

### 1. 問題の所在

この点については、これまでも拙論の中でその都度繰り返し述べてきたわけであるが、問題の設定上の根幹に関わる大切な点なので、省略せずに説明しておきたい。

冒頭でも述べたように、古フランス語では、主語が動詞の後に来る場合、その主語が人称代名詞であれば、かなり高い頻度で省略される旨の記述が一般的になされている。

例えば、Raynaud de Lage(1975: 149)は、

「主語は動詞の後にあると仮定される場合、極めて頻繁に省略される。特に主語が人称代名詞である時には、主文においても、疑問文においてさえも、省略される。」<sup>1)</sup>

と述べている。また、Ménard(1976: 52-53)は、

「文頭の直接または間接〔目的〕補語、状況補語、副詞は、《主語の倒置》を引き起こす。その主語が人称代名詞の時は省略される。

*Bien fu armez Guillelmes. (Prise d'Orange, 987)*

= Guillaume était bien armé (主語の倒置)

*Après mengier se departirent. (Perceval, 1923)*

= Ils se séparèrent après le repas(主語*il*の省略)〔〔 〕内は筆者による補足〕

としている。興味深いのは、Ménard(1988)〔1976年版の改訂増補版〕では、同じ箇所(52-53)の説明が、

「その主語が人称代名詞の時はしばしば (souvent)省略される。」〔下線部筆者〕

と訂正されている点である。1語の挿入がもたらす両者の記述の意味するところの違いはかなり大きい。前者では100%省略されることになるのに対し、後者では省略される程度はかなり下がることになり、しかも、受け取り方により、その程度に上下の幅が出てくることにもなって、全体として漠然としたものになる。そして、まさにこの点が、この後筆者が疑問に思っている問題と密接に関わってくるのである。

この頻度の表現は、研究者によりいろいろ異なっている。上述以外では他に、Buridant(2000:746)：「大抵の場合(le plus souvent)」, Foulet(1980: 313( §457))：「非常にしばしば(très souvent), 容易に(facilement)」, Hasenohr & Raynaud de Lage(1993: 234)：「頻繁に(fréquemment)」, Joly(1998: 290)：「ほとんどの場合(dans la plupart des cas)」, Moignet(1979: 357)：「非常に頻繁に(très fréquemment)」などが見られる。

いずれにせよ、これらの説明に従えば、主語と動詞が倒置される場合、動詞の後の人称代名詞主語は、上は100%から、下はある程度幅を持つものかなり高い頻度で省略されるということになる。しかし、筆者が実際に古フランス語のテキストに当たってみると、省略される場合があることはわかるが、省略されていない事例も相当数散見される。

Q.G. [32/19] <sup>2)</sup> Ce vos dirai je bien.

Q.G. [45/22] Et ainsi fus tu deceuz par entendement;

M.A. [14/24] <sup>3)</sup> car autrement seroit il desloiax,

M.A. [36/85] car adonques serions nos a repos,

Q.G. [187/19] Et ce rescousistes vos;

M.A. [87/6] ; por ceste chose ne tornerent il onques vers lui,

また、テキストにより省略の状況に差があることも、漠然とではあるが、感じられた。Bonnard & Régner(1989: 46-47)には、Moignetによる指摘として、次のような個別の作品ごとの具体的な記述も見られた。

「G. Moignet(1965, p.93)の調査によれば、『ロランの歌』では、2200から2704までの500行ほどについて、人称代名詞主語は、文の第1位の場所が補語によって占められている場合の98%近くで欠けている。ヴィルアルドゥアン〔の『コンスタンティノーブルの征服』〕では、252節から299節において、同様の場合に、人称代名詞主語は、全く

用いられていない。一方、より民衆的な言語で書かれた同時代（1200年頃）のロベール・ドゥ・クラリ〔の『コンスタンティノープルの征服』〕では全体の35%の場合に、また、1230年に遡る『アーサー王の死』では2分の1の場合に、人称代名詞主語が現れている。〕〔〔 〕内は筆者による補足〕

この指摘から考えられることは、テキストのジャンル、韻文散文の別、文体、言語レベル等により、省略の状況が異なるのではないかということである。また、作品の成立時期も関係しているであろう。ただこの指摘で問題なのは、用例の収集状況にばらつきが見られることであり、網羅的でないものが含まれている点である。筆者には、省略される事例と省略されない事例の比率が具体的にどうなっているのかという疑問と同時に、それをできるだけ明示的で実証的に調べるにはどうしたら良いのかという疑問が湧いた。

そこで、この疑問点を解明するために、この現象を扱うに当たった問題点の考え方、方法論についても、次に述べておく必要がある。

なお、本稿では、文を構成する主要要素であるS・V・C<sup>4)</sup>がすべて明示されている平叙文のうち、Cが文頭に立ち、後続のSとVが倒置されているCVS語順を取る事例のみを対象とする。

## 2. 問題点の考え方および方法

この問題の根底には、省略され消えている主語に対して、そもそもなぜそれが(a)「動詞の後」にあり、しかも(b)「人称代名詞である時」と言い得るのか、という根本的な疑問がある。多くの文法書で従来から言われている、省略されるか否かを分けるこの基準そのものに対する反証について説明しておく必要がある。

(b)「人称代名詞である時」という条件については（もちろん「動詞の後」という条件下でもあるわけであるが）、上述のQ.G.やM.A.事例を見れば、必ずしも省略されとは限らないということは明白であろう。

次に、(a)「動詞の後」という条件に関して、それを反証するものとしては、語であれ、句であれ、節であれ、文頭に立った全く同一のCに対して、①後続にVS/SV両語順が現れる（すなわち、語順にゆれが見られる）事例や、②SV語順のみが現れる事例を挙げることができる。こういうCの場合、主語が省略されていても、①については、それが動詞の後にあったとは必ずしも言えないし、②については、決して言えないと考えられるからである。例えば、①について次の例を見られたい。

(1) M.A. [16/63] Meintenant se part Lancelos de leanz ...

(2) M.A. [93/27] et maintenant messire Gauvains se part de court et ...

同じmeintenantが文頭に立ちながら、主語が、(1)では動詞の後に、(2)では動詞の前に来ている。このようなCが文頭に来る時には、主語が省略されていても、その位置は動詞の後であるとばかりは言えないはずである。また、次のような事例もある。

(3) *M.A.* [10/1] *L'endemain, quant il fu jorz, vindrent a un chastel ou li rois avoit jeu la nuit, ...*

この例において、動詞*vindrent*の主語 (*Lancelos et ses escuiers*ないし*il(pl.)*と考えられる)が省略されているのは、動詞の後であろうか、前であろうか。筆者は、動詞の後であるとは断言できないと考える。なぜなら、同様の環境に置かれた次のような実例があるからである。

(4) *M.A.* [89/14] *A l'endemain, quant li jorz parut, dist messire Gauvains a Lancelot: ...*

(5) *M.A.* [89/1] *Au soir, quant il fu tens de couchier, Lancelos se parti de leanz a grant compaignie de chevaliers;*

これらの事例を見る限り、例(3)と同様の統語環境にありながら、主語が、(4)では動詞の後に、(5)では動詞の前に来ており、動詞の後でも前でも現れる可能性があることを示している。従って、例(3)の主語は、必ずしも動詞の後で省略されているとは言えないのではないかということである。従って、(a), (b)2つの条件を満たしても、主語が100%省略されるというわけではないことは、実例が示す通り確かである。前述のように、*Ménard*(1988)が、「しばしば (*souvent*)」という語を挿入したのも、その点に気づいたからではないかと考えられよう。

(6) *M.A.* [41/83] *Quant la nuiz fu venue, messire Gauvains s'en vint a l'ostel le roi de Norgales;*

(7) *Q.G.* [51/12] *Et quant il est armez, il se part dou chastel,*

さらに、②についても、例(6), (7)に見られるように、*quant*~のような状況補語節(従属節)が、単独で文頭に来る複文の場合、筆者の知る限り、主語が名詞であれ人称代名詞であれ、主節はS V語順しか取らない。この場合でも主節の主語が省略されることは少なくないが、現れる時には動詞の前の位置にしか現れない主語が、省略されたからといって、その時だけどうして動詞の後であると言えるのであろうか。

この件について、*村上*(1977: 58)によれば、本稿で扱う問題とは異なるが、一般的に次のような指摘がなされている。

「S. [=主語]が省略されている場合、— これは古仏語には非常に多い — それがどの位置に省略されているかは永久にわからない問題であり、この種の例文は統計上省かざるを得ないであろう。」〔〔 〕内は筆者による補足〕

この見解は、傾聴に値する至極妥当なものであると筆者は考える。

また、*Moignet*(1965)は、Cが文頭に立つ(すなわち、CVおよびCVS語順の)全ての事例を対象にしているようであるが、上記のように、CVの事例についてはSが本当に「動詞の後」にあると言い得るか怪しいものが少なからず含まれることになるし、「人称代名詞である時」という条件については、どの例についてもそれを証明できる決定的な決

め手は無いように思われる。

以上の理由から、筆者は、Moignet(1965)とは視点を変え、この点が従来のアプローチとは異なるのであるが、明示的に「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を両方とも満たしているのに、省略されていない人称代名詞主語が、「動詞の後」の名詞主語に対してどういう出現比率になっているのかを調べてみたい。

#### 4. 資料体について

拙論(2005)では、韻律や作詩法上の制約を被らない散文のうちで、13世紀前半の散文作品である *La Queste del saint Graal* から資料体を作成し、分析した(注の2)を参照)。また、拙論(2007)では、Moignet(1965)の記述との対比も念頭に置いて、同時期の別の散文作品 *La Mort le roi Artu* を対象とした(注の3)を参照)。本稿では、同じく13世紀前半の散文作品とされる

*La Vie de saint Eustace*, Version en prose français du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. J. Murray, CFMA, Paris, Honoré Champion, 1929. [以後V.E.<sup>5)</sup>]

を資料とした。この資料については、用例を網羅的に収集して作成した資料体を既に拙論(2002)の中に掲載しており、それを利用した<sup>6)</sup>。非常に短い作品ではあるが、どのような傾向を示しているかを明らかにしておきたい。

#### 5. 用例収集の結果

上述の資料V.E.から網羅的に収集した用例を表にまとめたものが[V.E.表1]である。[V.E.表1]の見方について説明しておきたい。縦軸の区分は、文頭に来るCを、その位階<sup>7)</sup>と機能<sup>8)</sup>によりタイプ分けしたものである。例えば、C[MOT]<sub>op</sub>VSとは、「語の位階に属する直接目的補語」が文頭に来て、後続語順がV Sとなっている事例のタイプ、C[SYN][PROP]<sub>c</sub>VSとは、「句の位階に関係節や同格節などが付属している状況補語」が文頭に来て、後続語順がV Sとなっている事例のタイプということになる。横軸の区分は、文頭のCにより倒置されて「動詞の後」にありながら、省略されていないSを品詞別に区分してある。「その他」には、名詞(句)、人称代名詞以外のものが全て(例えば、不定代名詞、指示代名詞など)含まれている。さらに、[V.E.表1]の「人称代名詞」について、それを人称・数について下位区分したものが[V.E.表2]である。

#### 6. 分析と結論

[V.E.表1]からは、次の点が指摘できよう。

i) 本稿で得られたV.E.の用例収集の結果を見ると、先ず用例総数が64例と、拙論(2005)で扱ったQ.G.(928例)や拙論(2007)で扱ったM.A.(942例)に比べて少ないことが分かる。従って、同列には論じ得ないかもしれないが、主語が人称代名詞でありながら省略されて

(V.E.表1)

位階／機能による 文頭のCのタイプ	省略されていないS			合 計
	名詞(句)	人称代名詞	その他	
C[MOT] <sub>ob</sub> VS	1(50%)	1(50%)	0(0%)	2(100%)
C[MOT] <sub>c</sub> VS	13(36.1%)	20(55.6%)	3(8.3%)	36(100%)
C[SYN] <sub>ob</sub> VS	1(16.7%)	5(83.3%)	0(0%)	6(100%)
C[SYN][PROP] <sub>ob</sub> VS	0(0%)	1(100%)	0(0%)	1(100%)
C[SYN] <sub>oi</sub> VS	0(0%)	2(100%)	0(0%)	2(100%)
C[SYN] <sub>c</sub> VS	5(31.3%)	9(56.3%)	2(12.5%)	16(100%)
C[SYN][PROP] <sub>c</sub> VS	1(100%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)
合 計	21(32.8%)	38(59.4%)	5(7.8%)	64(100%)

(V.E.表2)

文頭のCのタイプ	je(ge)	tu	il/ele	nos	vos	il/eles	合計
C[MOT] <sub>ob</sub> VS	0	0	1	0	0	0	1
C[MOT] <sub>c</sub> VS	6	3	7	1	0	3	20
C[SYN] <sub>ob</sub> VS	2	0	3	0	0	0	5
C[SYN][PROP] <sub>ob</sub> VS	0	6	0	0	0	1	1
C[SYN] <sub>oi</sub> VS	2	0	0	0	0	0	2
C[SYN] <sub>c</sub> VS	2	0	4	0	0	3	9
C[SYN][PROP] <sub>c</sub> VS	0	0	0	0	0	0	0
合 計	12 (18.8%) [31.5%]	3 (4.7%) [7.9%]	15 (23.4%) [39.5%]	1 (1.6%) [2.6%]	0 (0%) [0%]	7 (10.9%) [18.4%]	38 (59.4%) [100%]

いない事例は64例中38例で、全体の59.4%と3つの資料体の中では最も高い割合を示している(同Q.G.: 40.9%, M.A.: 32.4%)。逆に、名詞主語の事例は、64例中21例で32.8%と3つの中で最も低い割合である(同Q.G.: 50.0%, M.A.: 59.3%)。この結果を見る限り、省略されていない事例が全体の6割近くを占めているのであるから、この資料体に関する限り、多くの文法書に見られるように、「大抵の場合、ほとんどの場合、非常に頻繁に(省略される)」というような表現は少なくとも当てはまらないと言えよう。

ii) また、Cの位階と機能による分布に関しても、用例総数の場合と同じ理由で同列には論じることができないかもしれないが、タイプ別用例総数が10例未満のものを除くと、

①人称代名詞主語の割合が最も多かったのは、C[SYN]<sub>c</sub>VSのタイプで、このタイプの全用例16例中9例を占める56.3%であった。2番目に多かったのがC[MOT]<sub>c</sub>VSタイプであり、このタイプの全用例36例中20例を占め、割合は全体の55.6%であった。

②名詞(句)の主語の割合が高かったタイプについては、人称代名詞主語の場合と順位が逆になって、1番目がC[MOT]<sub>c</sub>VSタイプで、全体の36.1%(全用例36例中13例)、2番目がC[SYN]<sub>c</sub>VSタイプで、全体の31.3%(全用例16例中5例)であった。

③名詞(句)主語の割合が最も高いのがC[MOT]<sub>c</sub>VSタイプである点は、Q.G.やM.A.とも全く同じである(Q.G.: タイプ全体の62.8%, M.A.: タイプ全体の65.7%)

次に、〔V.E.表2〕からは、次の点が指摘できよう。

iii) 〔V.E.表1〕と同様、用例総数は少ないが、人称代名詞主語の用例総数38例中最も多かったのは、3人称単数の15例で全体の39.5%であった。2番目が1人称単数の12例で全体の31.6%であった。この傾向はQ.G.(1位: 3人称単数で全体の37.4%, 2位: 1人称単数で全体の30.0%)と同じであり、3人称単数と1人称単数の両方で全体の7割程度になる点では、M.A.とも同様である(但し、M.A.では、1位: 1人称単数で全体の45.9%, 2位: 3人称単数で全体の27.4%)。

以上、今回も資料体を新たにしてS, V, Cがすべて明示されている平叙文のうち、C V S語順の事例を対象として、従来から基準とされてきた「動詞の後」と「人称代名詞である時」という2つの条件を満たしながら、省略されていない人称代名詞主語の名詞(句)主語に対する割合を、数量的に調べてみた。未だ限られた資料体からではあるが、従来とは異なるアプローチによる拙論(2005, 2007)および本稿を通じて、古フランス語の多くの文法書において画一的に類似の頻度表現で、そうであるかのような印象を与えてきた「動詞の後」で「人称代名詞である時」は、主語は「大抵の場合、ほとんどの場合」省略される」という記述は、13世紀前半という時期においてもさえも、そのまま鵜呑みにはできないという証拠はかなりの程度まで示すことができたのではないかと考える。今後も、さらに資料体の範囲を広げて調べて行きたい。

## 注

- 1) この引用箇所は、同書の大高順雄訳(1981: 105)〔参考文献欄参照〕に依った。
- 2) *La Queste del Saint Graal*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris, Honoré Champion, 1980. の32ページ/19行を示す。以下同様。
- 3) *La Mort le Roi Artu*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris, Droz/Minard, 1964. の14節/24行を示す。以下同様。
- 4) 古フランス語における文の主要構成要素は、主語(S: sujet)・動詞(V: verb)・補語(C: complément)であり、基本語順はS V Cである。また、この語順とCが文頭に立つ場合に取られるC V Sという2つの語順が最も頻繁な語順であり、これらは何れも文の第2

位に動詞があることから動詞第2位文と呼ばれ、古フランス語の語順の特徴とされている。

5) これまで拙論においてこの作品を引用する場合、S.E.という略号を使用してきたが、他の作品のタイトルの略号(M.A., Q.G.など)の表し方に倣ってV.E.とすることにした。

6) なお、この拙論(2002), p.9に示した〔表1〕には誤りが有ったので、この表に関わる他の引用箇所も含めて右表のように訂正したい。下線部が訂正箇所である。

7) ここでいう位階とは、M. A. K. Hallidayなどを中心とする体系文法(systematic grammar)で用いる術語rankの意味である。『現代言語学辞典』(成美堂, 1988)によれば、「文法の諸単位は異なる大きさをもつ形式的項目であるが、その諸単位は大きさという尺度に従って配列される。それぞれの単位は階層(hierarchy)をなす。これら単位間の関係を位階という。」とある。フランス語における基本的な単位を大きい方から順に挙げれば、文(phrase) > 節(proposition) > 句(syntagme) > 語(mot) > 形態素(morphème)となる。

8) 機能とは、具体的には、直接目的補語(C<sub>OD</sub>: complément d'objet direct), 間接目的補語(C<sub>OI</sub>: complément d'objet indirect), 状況補語(C<sub>c</sub>: complément circonstanciel)の3つの機能を指す。

文頭 \ 後続		-V-S	-S-V
C [MOT]	C <sub>OD</sub>	1 ( 2)	0 ( 0)
	C <sub>OI</sub>		
	C <sub>c</sub>	14 ( 36)	2 ( 2)
C [SYN]	C <sub>OD</sub>	6 ( 6)	0 ( 0)
	C <sub>OI</sub>	<u>1 ( 2)</u>	
	C <sub>c</sub>	13 ( <u>16</u> )	2 ( 2)
C [PROP]	C <sub>OD</sub>		
	C <sub>OI</sub>		
	C <sub>c</sub>	0 ( 0)	8 ( 41)

### 参考文献

- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite grammaire de l'ancien français*, Paris, Magnard.
- Buridant, C. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris, SEDES.
- Foulet, L. (1935): L'extension de la forme oblique du pronom personnel en français, *Romania*, 61, pp.257-315, 401-463; 62, pp.27-91.
- Foulet, L. (1980<sup>3</sup>): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Franzén, T. (1939): *Etude sur la syntaxe des pronoms personnels sujets en ancien*



- français*, Upsala.
- Hasenohr, G. & Raynaud de Lage, G. (1993<sup>2</sup>): *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES.
- 今田良信(2002): 「古フランス語における語順変化の研究のために — 13世紀散文作品 *La Vie de Saint Eustace* による資料体作成 — 」, 『ニダバ』(西日本言語学会編), 31, pp. 1-10.
- 今田良信(2005): 「古フランス語における C V S 語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について — 13世紀散文作品 *La Queste del Saint Graal* を資料として — 」, 『広島大学フランス文学研究』, 24, pp. 372-383.
- 今田良信(2007): 「古フランス語における C V S 語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について — 13世紀散文作品 *La Mort le roi Artu* を資料体として — 」, 『ロマンス語研究』, 40, pp. 88-97; p. 109.
- Joly, G. (1998): *Précis d'ancien français*, Paris, Armand Colin.
- Ménard, Ph. (1976): *Manuel du français du moyen age: I. Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, SOBODI.
- Ménard, Ph. (1988<sup>3</sup>): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, Bière.
- Moignet, G. (1965): *Le pronom personnel français: Essai de psycho-systématique historique*, Paris, Klincksieck.
- Moignet, G. (1979<sup>2</sup>): *Grammaire de l'ancien français*, Paris, Klincksieck.
- 村上勝也(1977): 「主格関係代名詞節における古仏語の語順 — S. C. V. 構文の種々相 — 」, 『広島文教女子大学研究紀要』, 12, pp. 49-58.
- Raynaud de Lage, G. (1975<sup>9</sup>): *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES. [大高順雄訳『古フランス語入門』, 朝日出版社, 1981]
- Thurneysen, R. (1892): Die Stellung des Verbuns im Altfranzösischen, *Zeitschrift für romanische Philologie*, 16, pp. 289-307.
- Vidos, B. E. (1959): *Manuale di linguistica romanza*, Firenze, Leo S. Olschki.
- Wartburg, W. von(1962<sup>2</sup>): *Einführung in Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft*, Tübingen, Max Niemeyer. [島岡茂訳『言語学の問題と方法』, 紀伊國屋書店, 1973]
- Wartburg, W. von(1971<sup>10</sup>): *Evolution et structure de la langue française*, Berne, Francke. [田島宏・高塚洋太郎・小方厚彦・矢島猷三共訳『フランス語の進化と構造』, 白水社, 1976]